十和田ゆかりの偉人たち展

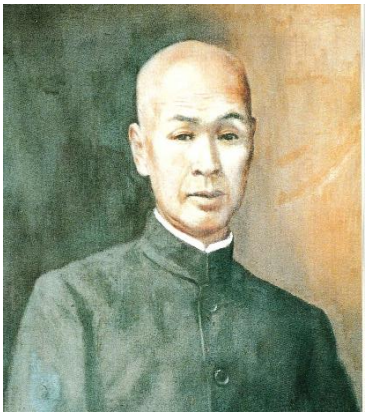
偉人でたどる十和田市の歴史!

日本資本主義の父
渋沢 栄一
（しぶさわ えいいち）

三本木原の開拓
新渡戸 傳
（にとべ つとう）

我、太平洋の橋とならん
新渡戸 稲造
（にとべ いなぞう）

十和田湖・奥入瀬渓流を紹介
大町 桂月
（おおまち けいげつ）



藤坂地区の教育に力を尽くす
加藤 源三
（かとう げんぞう）

東北の米づくりを変えた
田中 稔
（たなか みのる）

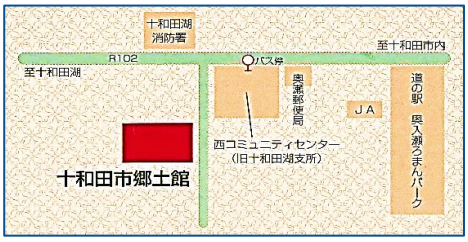
令和５年

9/23㊏ ▸ 11/23㊍

午前9時～午後5時　月曜日休館

観覧料　無料

十和田市郷土館



東北新幹線「七戸十和田駅」・「八戸駅」から十和田観光電鉄バス乗車「十和田市中央」下車、焼山行き「西コミュニティセンター前」下車、徒歩1分

十和田市大字奥瀬字中平 61 番地8
☎ 0176-72-2340

はじめに

十和田市は、十和田湖、奥入瀬、八甲田などの日本を代表する自然豊かな観光地や県内有数の農畜産物の生産地、碁盤の目状の近代的な市街地を特徴とする県南地方を代表するまちとして知られています。しかし、十和田市が現在のように発展するまでには、多くの先人達のたゆまぬ努力がありました。この展覧会では、十和田市の発展の基礎を作った偉人たちにスポットをあてました。先人たちの業績と市発展の歴史を知ってもらう良い機会となれば幸いです。

出典：十和田市教育研修センター郷土学習資料

法蓮寺を開いた鎌倉時代の名僧

法身禅師

生没年　1189年～1273年

出身地　茨城県

法身（心）禅師は今から約800年前、鎌倉時代の人です。日本国内のお寺はもとより中国でも修行をし、宮城県松島の円福寺（現在の瑞巌寺の前身）を開くなどしました。その後、市内の洞内集落にある法蓮寺の初代和尚となりました。法身は地域の人々に仏の教えをとくかたわら、農業を教えるなど地域の発展にも力をつくしたと言われています。

洞内地区には、法身が修行僧とともに耕したとされる「客僧田」や農作業の際に袈裟をかけた「袈裟懸けの松」、法身の墓とされる「法身（心）塚」などのゆかりの史跡が残されています。

新渡戸傳は、無益の野原とも呼ばれた三本木原台地の開拓をおこない、十和田市発展の基礎をつくりました。

寛政５年（1793）花巻で盛岡藩につかえる武士の子として生れますが、27歳の時、父維民が藩より処分を受けたため、材木商などを営みます。45歳の時に盛岡藩の藩士に復帰。商人時代に学んだ知識を生かし、勘定奉行などの役職にもついています。

安政２（1855）年、62歳の時に、盛岡藩の許可を得て、広大な三本木原台地の新田開発に着手。三本木原に水を引くため、「稲生川」の開削をおこない、成功に導きました。

三本木原の開拓に着手

新渡戸　傳

生没年　1793年～1871年

出身地　岩手県花巻市

出典：十和田市教育研修センター郷土学習資料

父とともに三本木原の開拓に尽力

新渡戸 十次郎

生没年 1820年～1867年

出身地 岩手県花巻市

父の新渡戸傳とともに三本木原開拓に携わり、現在の十和田市の市街地の基礎となる「新町」を構想しました。

息子に「武士道」などで国際的に知られる新渡戸稲造がいます。安政３年、父傳の後を継いで三本木原の開拓に従事。安政６年５月には、稲生川の通水に成功しました。その後、開墾事業の拠点となる「新町」の建設にとりかかり、京都の市街地をまねた碁盤の目状の町並を計画しました。また、まちづくりに合わせて、陶器を焼かせたり、馬市を開設するなど産業の振興にも務めました。

新渡戸十次郎の三男で、明治～昭和期の教育者、農学者、政治家で、著書「武士道」は広く知られています。文久２（1862）年、岩手県で生まれ、当時、祖父傳、父十次郎が三本木原で新田開発をおこなっていたことにちなみ幼名を稲之助と名付けられました。その後、札幌農学校や海外での留学の後、第一高等学校校長、東京帝国大学教授などを歴任。大正９（1920）年には、ジュネーブにある国際連盟の事務次長となり約７年間、世界平和のために尽くしました。祖父傳、父十次郎のゆかりの地である三本木にも何度も訪れています。

出典：国立国会図書館 HP

われ、太平洋の橋とならん

新渡戸 稲造

生没年 1862年～1933年

出身地 岩手県盛岡市

出典：国立国会図書館 HP

日本資本主義の父・渋沢農場の開設

渋沢 栄一

生没年 1840年～1931年

出身地 埼玉県深谷市

明治時代～大正時代の実業家です。500もの企業の設立などに関わったほか、約600の教育機関や社会福祉事業などを支援し、日本の近代化に大きな足跡を残しました。令和６年から発行される新しい一万円札の肖像となることが決定しています。

当地域でも、新渡戸氏が着手した三本木原開拓の継続に積極的な支援をおこなう一方、自らも現在の十和田市、六戸町、おいらせ町に広がる広大な開拓地に渋沢農場を設立し当地方の農業の近代化に大きく貢献しました。

新渡戸氏の大志を継いで、三本木原の開拓にその生涯をささげた人です。明治 28（1895）年石川県の出身で、大正 9（1920）年、三本木の地を訪れ、稲生川の利用を巡り起こっていた紛争を見事解決し、渋沢農場の 5 代目農場長に就任します。その後、農場経営に携わりながら、三本木原の国営開墾を実現させるため勢力的に活動しました。国営開墾が実現する昭和 12 年まで陳情活動を続け、その回数は 379 回に及んだといわれています。昭和 30（1955）年には三本木市の誕生とともに市長となり、昭和 54（1979）年には十和田市名誉市民に選ばれました。

出典：十和田市教育研修センター郷土学習資料

大志をついで三本木原開拓に取り組む

水野　陳好

生没年　1895 年～1991 年

出身地　石川県松任市

出典：十和田市教育研修センター郷土学習資料

東北の米作り変えた

田中　稔

生没年　1902 年～1993 年

出身地　東京都

冷害に強い稲を開発し、寒冷地の農業の発展に尽くしました。昭和 10（1935）年、開設間もない青森県上北郡藤坂村の農林省冷害防止試験地に赴任。試験地近くの冷たい湧水を利用して寒さに強い稲をさがしだしてはそれを掛け合わせる作業を 10 年以上続けた結果、冷害に強い品種「藤坂 5 号」を生み出します。「藤坂 5 号」はたちまち評判を呼び、昭和 27（1952）年には作付面積が 1 万ヘクタールを超え、東北地方の米作りの安定化と生産増に大きく寄与しました。昭和 28 年にはその功績が認められ総理大臣から表彰を受けています。

高知県出身で、本名は芳衛といいました。明治から大正期に活躍した詩人、歌人、随筆家、文芸評論家、紀行作家です。

明治 41（1908）年、雑誌の編集長で五戸出身の鳥谷部春汀の依頼で、はじめて十和田湖、奥入瀬渓流を訪れます。あまりの美しさにすっかり心を奪われた桂月は雑誌「太陽」に一文を寄稿。十和田湖、奥入瀬渓流は全国に広く知られるきっかけを作りました。蔦の仙境をことさらに愛し、晩年は蔦温泉に逗留。大正 14（1925）年には、本籍を同地へ移していますが、2 か月ほどした 6 月 10 日に亡くなりました。

大町桂月を語る会提供

十和田湖・奥入瀬渓流の紹介者

大町桂月

生没年　1869 年～1925 年

出身地　高知県

出典：十和田湖町史

十和田湖・奥入瀬渓流の開発に奔走

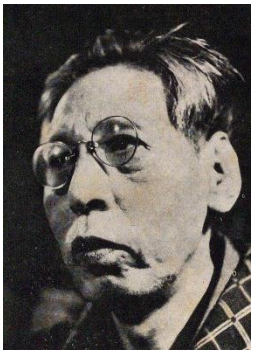
小笠原 耕一

生没年 1868 年～1927 年

出身地 青森県十和田市

十和田湖開発に生涯をささげた政治家です。上北郡奥瀬村の出身で、明治 35（1902）年法奥沢村の村長に選任。同年凶作の救済事業として、奥入瀬渓流の林道建設を大林区署（現在の営林署）に提案します。当時の奥入瀬渓流には道が無く、十和田湖の観光的な価値とともに、美しい渓流が人々を引き付けるだろうと事業の必要性を訴え、実現させています。

明治 44（1911）年法奥沢村の村長のまま、県議に当選。当時の知事であった武田千代三郎と意気投合し、十和田湖開発に奔走。十和田湖の国立公園化にも力を注ぎました。



出典：国立国会図書館 HP

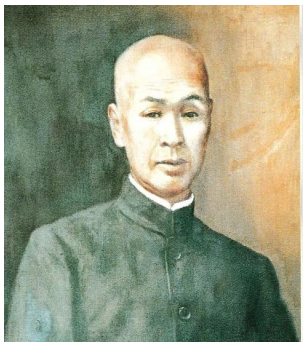
三本木高校の校歌を作詞

佐藤 春夫

生没年 1892 年～1964 年

出身地 和歌山県

明治末から昭和にかけて活躍した詩人・小説家です。代表作に詩歌「純情詩集」、小説「田園の憂鬱」、「晶子曼陀羅」などがあります。昭和 24（1949）年に三本木女子高等学校が男女共学の三本木高等学校となったことから、依頼により校歌を作詞。昭和 26（1951）年の校歌披露では、夫婦で三本木を訪れ、その折に十和田湖・奥入瀬渓流も探訪、その景観に感動しています。これが縁となり「乙女の像」の製作を含む十和田国立公園指定 15 周年を記念する事業にも参加。昭和 28 年 10 月の乙女の像序幕式では自ら作詞した「湖畔の乙女」が披露されました。



出典：十和田市教育研修センター郷土学習資料

藤坂地区の教育に生涯ささげる

加藤 源三

生没年 1867 年～1943 年

出身地 青森県北津軽郡中泊町

明治時代から昭和時代にかけて、藤坂地区の教育と地域づくりに一生をささげた人です。慶応3（1867）年現在の中泊町に生まれ、明治 18（1885）年、18 歳のときに上北郡相坂村の相坂小学校（現藤坂小学校）に赴任、以後 40 年間、退職まで同校で教師をつとめました。「誠・愛・熱」をモットーに、教育を進める傍ら青年教育にも力を入れ、読書をおこなう「以文会」や仕事をしながら国語や算数、農業技術を学ぶ「夜学会」を開き、地域づくりにも尽力しました。源三の言葉「加藤訓」は現在でも地域の人々に受け継がれています。

明治時代から昭和時代にかけての実業家、政治家です。上北郡相坂出身で、苦学をしながら札幌中学校、東京工業高等学校を卒業。学校卒業後は、阿部製紙会社、大阪硫曹株式会社等を経て昭和20（1945）年には、日産化学工業株式会社の社長に就任しました。昭和21（1946）年に衆議院議員に初当選し、昭和22年に片山内閣の運輸大臣、昭和 23 年に芦田内閣の官房長官などを歴任しました。また、昭和26（1951）年には日本の独立を認める平和条約調印のため、サンフランシスコ講和会議に全権委員の一人として出席しました。

出典：国立国会図書館 HP

平和の使い

苫米地 義三

生没年 1880 年～1959 年

出身地 青森県十和田市

出典：十和田市教育研修センター郷土学習資料

畜産振興に力をつくした政治家

小笠原 八十美

生没年 1888 年～1956年

出身地 青森県十和田市

十和田湖開発や畜産振興に生涯をささげた政治家です。明治21（1888）年上北郡法奥沢村の出身で、明治42（1909）年から実業界に乗り出します。十和田湖観光の重要性に目を付けた八十美は、タクシー会社の運営や十和田湖畔での旅館経営をおこない、力をつけていきます。大正14（1925）年に三本木町会議員。昭和2（1927）年に青森県会議員に当選。さらに昭和11（1936）年には衆議院議員に当選し政界で活躍しました。馬産地出身の議員として畜産の振興に務め、全国畜産農業協同組合連合会の会長などをつとめ「馬議員」の異名をとりました。

当地域の俳句文化の振興に寄与しました。上北郡三本木村出身で、大正12（1923）年に八戸中学校に入学し、在学中に俳句の魅力を知ります。昭和6年には、益川山彦、斗沢酔花、一穂の3名で上北地区初の俳句団体「牧草吟社」を作りました。戦後も小学校の教師をつとめる傍ら俳句活動を続け、昭和29（1954）年には上北郡俳人連盟を結成し、機関紙「火山群」を発行するなど地域を牽引しました。また、萬緑賞をはじめ、角川俳句文化賞、県文化賞、地域文化功労者文部大臣賞など多数を受賞し、俳人として全国的に高い評価を受けました。

出典：十和田市教育研修センター郷土学習資料

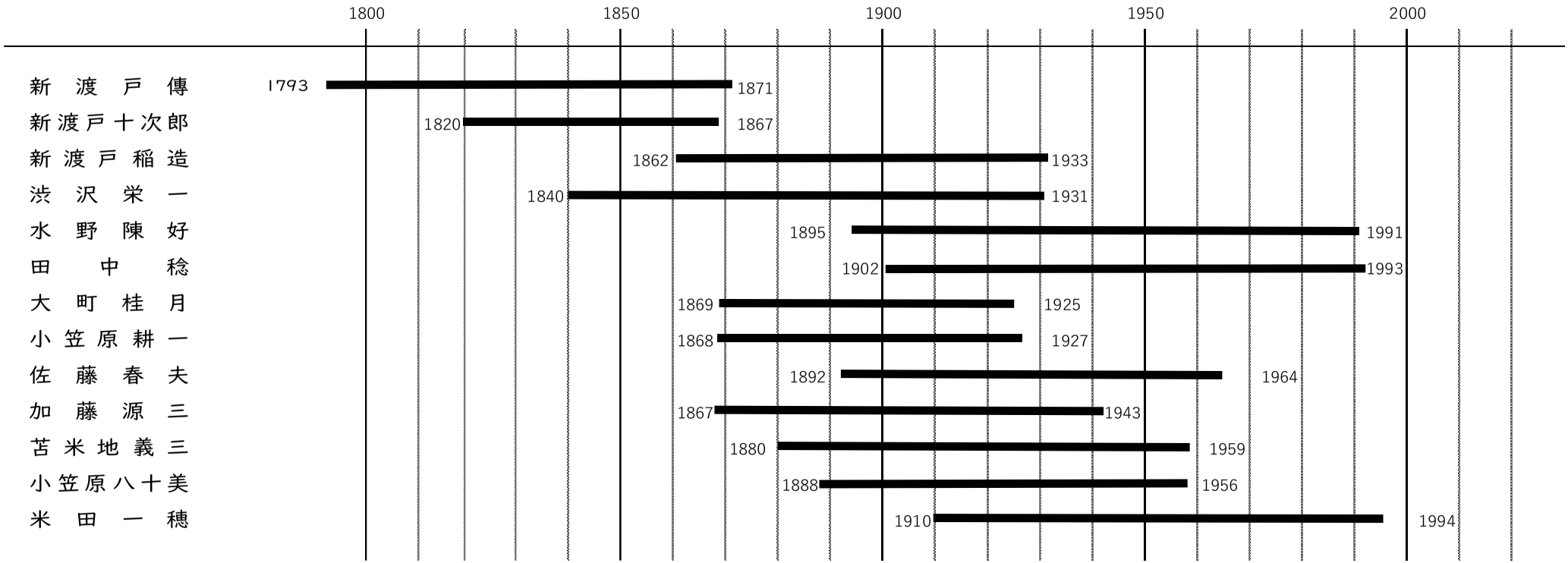
地域の俳句文化を牽引

米田 一穂

生没年 1910 年～1994 年

出身地 青森県十和田市

「十和田ゆかりの偉人たち展」年表



1783・天明の飢饉

1825・新渡戸伝ら、十和田山に入り木材を切り出す。

1838・天保の大飢饉

1855・三本木原の開墾開始

1859・稲生川上水成功

1860・三本木新町建設はじまる

1868・明治維新

1871・青森県ができる

1873・三本木小学校開校

1885・三本木に軍馬出張所設立

1889・町村制施行

1890・渋沢農場設立

1899・新渡戸稲造「武士道」を刊行

1903・奥入瀬渓流に林道完成

1910・三本木町誕生

1922・十和田鉄道開通

1925・文人大町桂月蔦に移り住む

1936・十和田湖一帯が国立公園へ

1937・三本木原の国営開墾が決定

1945・太平洋戦争終る

1949・藤坂5号奨励品種となる

1953・乙女の像完成

1955・三本木市、十和田町誕生

1963・十和田湖温泉郷誕生

1968・十勝沖地震

1974・米田一穂角川俳句文学賞受賞

1979・水野陳好名誉市民に選ばれる

1984・新渡戸稲造、お札の肖像になる

1986・官庁街通り日本の道100選へ

1993・シンボルロード整備事業完成（官庁街通り）

2005・旧十和田市、十和田湖町が合併。新十和田市誕生

2014・十和田バラ焼きゼミナールBIグランプリ優勝

2019・元号が平成から令和へ

2024・渋沢栄一、新札の肖像へ

メモ